
アンジェリーク | Clavis | まわり道

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンジェリーク—Clavis—まわり道

【Nコード】

N4710D

【作者名】

翠

【あらすじ】

【クラヴィス×リモージュ】新女王アンジェリークのもと、新しい宇宙（神鳥の宇宙）は順調に成長していた。そんな女王試験終了後間もない聖地のできごと。

(前書き)

KOEIから発売されているネオロマンスゲームシリーズ

「アンジェリーク」の二次創作です。

原作やキャラクターイメージを壊してしまうおそれがあります。

また、ネタバレも含まれますので、それらを十分ご理解の上、ご覧いただけますと幸いです。

クセのない艶やかな金色の髪を風に遊ばせながら、意志の強そうな瞳を真っ直ぐに向けて彼女は微笑んでいる。それは、遠い昔に彼の心を捕らえて離さなかった、太陽のような屈託のない笑顔。別れ際にあつても、その笑顔は彼に不思議と安らぎを感じさせてくれた。一言二言と、会話を交わす。彼が頷くと、最後に安心したようにもう一度微笑んで、彼女は背を向けた。そしてもう振り返ることもなく、親友と供に聖地を去って行った。

その背中に、彼は何を思ったのだったか。

紫黒の衣装を身に纏った青年は、自邸の庭を散策していた。穏やかな風が木々の間を吹き抜けるたびに、揺れる枝葉の隙間から差し込む木漏れ日も踊る。するとそのダンスにあわせるかのように小鳥たちがさえざり、動物達が集う。風のざわめきと小鳥達の歌。そんな控えめなBGMに乗せて、目に映るのは木漏れ日のダンスと動物達の営み。ここには喧騒もなく、かと言って静寂もない。まるでその身が司るサクリアのように、闇の守護聖邸の庭は安らぎに満ちていた。

ふと、青年の足が止まる。

その深い闇を湛えた二つの瞳が、いつもの風景の中に異分子を見出していた。木陰に横たわるその影は、よく見かける銀髪の少年のものとは違う。

大きなバスケットにもたれかかるようにして眠っているのは、白とピンクで彩られたワンピースを着た少女。肩口まで伸びた、ゆる

やかにウェーブした金色の髪には、ピンクのリボンが結わえられている。

『動揺』などという言葉とは無縁の青年も、さすがに眉をひそめた。なぜなら目の前の少女はこの場にいるはずのない、いてはいけない存在だったから。

「……………女王よ、何をしている」

「ん……………」

少女は金のまつげを震わせ、まぶたの間から深緑の瞳をのぞかせると、ゆっくりと身体を起こし伸びをしながら大きなあくびをひとつした。

焦点の定まらない二つの瞳は、緑の中にある黒いものに気づき、伸びをしていた腕を止めた。そして、その「黒いもの」が誰であるのかを認識するとさらに固まった。

「ク、クラヴィス様っ！！」

真っ赤になりながら立ち上がり、髪や服を整えている少女を見つめる紫の瞳は伏せられた。

「……………そんな呼び方をされる覚えはない。それに、ここは女王の来る所ではない」

クラヴィスは言外に「帰れ」と匂わせると、少女に背を向け、立ち去ろうとした。

「待つてくださいー！」

思いがけず強い力で少女に腕を引っ張られ、驚いて振り返ると、少女は真っ直ぐクラヴィスを見上げていた。

「今日は、日の曜日です。宇宙はクラヴィス様をはじめ、守護聖の皆様のおかげで安定しているので、私もゆっくりお休みを頂けません。だから……………だから、それに甘えてお休みの日ぐらいは女王であるこ

とを意識せずに過ごしたいと思って……ダメですか？ 共をつけずに歩き回っては。ダメですか？ 好きなところに遊びに行っては……」

少女はうつむき、クラヴィスの腕をつかむ手に力が込められたかと思うと、冷たい雫がひとつふたつ腕を伝い落ちた。

「……ダメなんですか？ 昔みたいに……名前で呼んでくれても、いいじゃないですかあ」

ドサクサにまぎれて微妙に関係ないことを口走り、腕にしがみついたまましゃくりあげだした少女を呆然と見つめていたクラヴィスだったが、我に返るとフツツと口元を緩めた。

「離さぬか……アンジェリーク」

アンジェリークはびくつと身体を震わせ、クラヴィスから手を離した。

「あ、名前……」

拒絶とも取れた言葉の中に、自身の名が含まれていたことに気がついたアンジェリークは、大きく見開いた深緑の瞳を濡らしながらうれしそうに微笑んだ。

クラヴィスは嘆息した。

女王は、その力を持って宇宙を安定へと導く。いつも宇宙のことを考え、行動することを求められる。それゆえ、自由は制限される。クラヴィスは、アンジェリークが抜け出して来たのだと想像はついていたが、何に対しても一所懸命な彼女が、休みの日とはいえ供をけずりに行動する理由が思いあたらなかった。

「何をしにきたのだ？」

女王候補の時代から、突拍子もない事をしてきた少女のする事に驚き、呆れつつも、その行為は決して嫌なものではなかった。

大きなバスケットをよいしょと持ち上げると、アンジェリークは真面目な顔で答えた。

「はい。あの、一緒にピクニックに行きませんか？」

「……そのために来たのか？」

クラヴィスは軽い目眩を覚えた。

「はい！ でも、朝早く起きてお弁当を作ったので、ここで迷子になつてる間に、眠つてしまつたみたいです」

アンジェリークは視線を落とすと、ひとつひとつ言葉を選び、整理しながら自分の気持ちを伝えた。

「自分が不器用なことはわかっています。ですから、女王候補のときに、クラヴィス様の手を取ることはできませんでした。でも、聖地で時を重ねるうち、私は……とてもわがままになつてしまいました。女王として、この宇宙と共に生きていくと決めました。今も、その思いにかわりはありません。けれど、女王としての時間を終えるとき、クラヴィス様が守護聖としての時間を終えられるとき……共にありたいと願うようになってしまったのです」

思い切つたように顔を上げると、アンジェリークは深緑の瞳で真っ直ぐにクラヴィスを見つめた。

「私は、私に出来る事を精一杯しようと決めました。お仕事は、お仕事できちんとして。お休みの日は、やってみたい事を、思い切つてやってみよう。だから、来ました。ここへ」

そう言つて、自信に満ちた表情で微笑むアンジェリークはとても眩しくて、クラヴィスは思わず紫の瞳を細めた。脳裏によぎるのは、同じ金の髪をもつ女性。彼の手をとることもなく、女王としての時を駆け抜け、そして去つていった。

クラヴィスは青い空を見上げ、深いため息を一つつくと、左手で額を覆い、肩を震わせた。

「クラヴィス様？」

いきなり笑い出したクラヴィスを、アンジェリークは不安そうに見つめる。クラヴィスは漆黒の髪をかきあげながら、すがるように見つめてくる少女に視線を移す。

(お前は、宇宙も私も手に入れようとするのか)

遠い昔、謝罪の言葉を繰り返して、泣いていた彼女の姿が思い浮かぶ。

(……そうか、何に対しても一所懸命、だったな)

クラヴィスは少しいじわるく微笑むと、少女の頭をぼんと叩き、バスケットを取り上げた。

「……どこに行きたいのだ？ 見つかるの色々うるさい連中が、うるうるしているかも知れぬぞ」

(この女王なら、出来るのかもしれない。代々の女王が成し得なかったことを……)

アンジェリークは、いたずらを思いついた子供のような顔をして、元気に答えた。

「大丈夫です。この前ロザリアと、とっておきの場所を見つけたんです。そこなら誰にも見つからないですよ」

ナイシヨですよ。と、人差し指をくちびるにあてる。

一緒に見つけた、青い髪の女王補佐官には見つかるかもしれないと、思い至らないのだろうか。絶対の自信を持っているその様子を見て、思わずふきだしてしまうクラヴィスだった。

(……降参だ。これから、この宇宙がどう発展していくのか、この頼りない女王が、どう導いていくのか、見ていよう)

なぜ笑われたのかわからないアンジェリークはきよんととしていたが、クラヴィスに先を促されると、顔をほころばせた。

「……では、行くか」

「はい！」

(それも、悪くはない)

世界を支える女王と、それを支える闇の守護聖は、優しい光がさす庭を共に歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4710d/>

アンジェリーク | Clavis | まわり道

2010年10月8日15時07分発行